

らホテル代などは高く、研究所のサポートがあったとはいえ、規定の費用から足が出たため、費用の一部は自腹となった。少しでも安いホテルを探す機会費用も意外と大きい。

しかし、一番の痛手は育児についてだ。一人娘がいるが、土日が学会ということで、妻一人に娘を見てもらうこととなった。妻は平日フルタイムで就労しており、土日は身体を休める貴重な休日だが、負担をかけてしまった。オンラインだとこれらのデメリットは基本ない。テレワーク研究の報告をいくつか聞き、討論を務めた。テレワークは生産性を高めるという研究結果があったが、必ずしもそうではないのではないかと思う。一方で、 $n=1$ の個人の感想に過ぎないが、テレワークの育児への効果は正に有意であろう。(茂木洋之 記)

日本人口学会2022年度第1回東日本地域部会

2023年9月20日(水)午後及び9月21日(木)午前の2日間の日程で、東日本地域部会が札幌市立大学サテライトキャンパスにおいて、対面とZoomによるオンラインのハイブリッド形式で開催された。昨年度の東日本部会では、11の口頭報告が行われるという近年開催された地域部会のなかでも最も報告数の多い部会となり、ほとんどの報告において質疑を途中で打ち切るようなやや忙しい進行となった。地域部会は人口学会・年次大会と比べて萌芽的な課題や技術的な側面を含む報告についても詳細な議論ができる場という性格があることから、今回の部会は余裕をもったスケジュールで開催されたものである。

今回の部会では、対面参加者による5報告とオンライン参加者による3報告とを合わせた8の口頭報告が行われた。社人研からは、清水室長と菅が報告を行った。そのほか、オンライン参加者の出席総数は正確に把握していないが、常時20名前後の参加があったように思う。当初計画された日程から急遽開催日程が変更になったことや大学に所属する学会員は学事等の事情があったためと推察されるが、昨年度と比べると小規模な開催となった。一方で、報告時間に余裕をもったプログラムであったため、すべての報告について技術的な側面も含む濃密な討論が行われたことが印象的であった。来年度以降も、十分な討論時間が確保され、各参加者が相互に刺激を受ける有意義なものとなることを期待したい。

なお、プログラムは日本人口学会のホームページ(「2023年度第1回東日本地域部会開催のお知らせ(第2報)」)に掲載されているため割愛する。(菅 桂太 記)

第82回日本人口学会九州地域部会

2023年9月24日(日)午後、佐賀県佐賀市西九州大学佐賀キャンパスにて、第82回日本人口学会九州地域部会がハイブリッド形式で開催された。佐賀出身の山本和子琉球大学第一内科教授による「新型コロナウイルスのプラネタリーヘルス」と題する特別講演に続き、佐藤龍三郎 中央大学経済研究所、原俊彦 札幌市立大学名誉教授により近著の紹介報告がなされた。その後、筆者による「1920年前後の乳児死亡率と出生率の低下要因—非嫡出出生割合に注目して」、有馬久富 福岡大学医学部衛生・公衆衛生学講座教授による「長崎県壱岐市における慢性腎臓病(CKD)予防の取り組み」の二報告が行われた。

今回の日本人口学会九州地域部会は第82回であり、今年が第75回であった全国大会よりも回数が多いが、これは一年に複数回行うことがあったからのようである。九州部会は医学・保健関係者が多く、

日本人口学会創設時からの会員である生命表研究で著名な水島治夫九州大学名誉教授（1896～1975）の影響であろうか。日本人口学会の地域部会にはそれぞれ特色があり、その特徴を生かしながら地域の人口研究ネットワークが拡充されることが期待される。来年の日本人口学会九州地域部会は今年と同時期に、福岡大学で開催されることが予定されている。（林 玲子 記）

第96回日本社会学会大会

第96回日本社会学会大会が、10月8日（日）～9日（月・祝）にかけて、立正大学品川キャンパスで開催された。同大会は、社会学における国内最大規模の研究者組織である日本社会学会が主催となり、年に1度開催している。同学会は、社会学が扱うすべての分野を対象とした学会であるため、大会ではセッションが多数設定される。今大会では、通常セッションとして50、テーマセッションとして24、ポスター報告として1のセッションが設けられ、家族、教育、歴史、階層、意識、都市、理論、研究法・調査法などのトピックについて最新の研究成果が報告された。会期中はそれぞれのセッションにおいて、報告者とフロアの間で活発な議論が展開された。また、研究報告に加えて、学会奨励賞の授与式・受賞者講演と、3つのシンポジウムも行われた。国立社会保障・人口問題研究所からは、中村真理子（情報調査分析部研究員）と竹内麻貴（国際関係部室長）が以下の報告を行った。

【一般報告】

- ・ 中村真理子、「未婚者の学歴と性交渉経験——1980年代以降の変遷に注目して」
- ・ 竹内麻貴、「インフォーマル雇用に立ち向かう社会政策の構想 3）自営は育児と両立しやすいのか——ワーク・ファミリー・コンフリクトの就業形態間・内比較」

（竹内麻貴 記）

南部アメリカ人口学会（Southern Demographic Association）年次大会

2023年10月18日（水）から10月20日（金）にかけて南部アメリカ人口学会の年次大会が開催された。本大会では全29のセッションが設置され、出生や死亡、移動といった一般的なセッションから、近年関心の高いCOVID-19や環境問題についてのセッション、あるいは米国南部の人口に焦点を当てたセッションや南部アメリカ人口学会が発行している“Population Research and Policy Review”のためのセッションなど本学会ならではのセッションも設置されていた。

報告内容についても様々であり、一般的な定量分析やモデル研究に関する報告から、先行研究のレビュー報告や近年増加している機械学習による人口推計に関する報告、データ紹介の報告など、他の人口学会と比較して多様な報告形態が容認されている印象を受けた。

著者も“Comparison of Future Projections and Simulation Results of Household Energy Consumption in Japan, 2020-2040”と題し報告を行ったが、人口学に限らず、エネルギー学や家族社会学など様々な分野の専門家から意見を聞くことができた。

次年度の大会は開催地が未定であるが本年と同様に10月に開催予定である。関心のある読者は南部アメリカ人口学会の公式ページ（<https://sda-demography.org/>）より確認されたい。

（井上 希 記）